

日蓮大聖人御書全集

かえんじょうごうしよ

可延定業書

新版
1307
ゝ
1309

か えんじようごうしよ
可延定業書

ぶんえい ねん
文永12年('75)
さい と きあま
54歳 富木尼

そ やまい ふた いち きようびよう に じゅうびよう
夫れ、病に二つあり。一には軽病、二には重病。

じゅうびよう ぜんい あ すみ たいじ いのち そんな
重病すら、善医に値つて急やかに対治すれば、命なお存

きようびよう ごう ふた いち じようごう
す。いかにいわんや軽病をや。業に二つあり。一には定業、

に ふじようごう じようごう よ よ ざんげ かなら しようめつ
二には不定業。定業すら、能く能く懺悔すれば、必ず消滅

ふじようごう
す。いかにいわんや不定業をや。

ほけきようだいしち い きよう すなわ えんぶだい ひと
法華經第七に云わく「この經は則ちこれ閻浮提の人の

やまい ろうやく とううんぬん きようもん ほけきよう もん いちだい
病の良薬なり」等云々。この經文は法華經の文なり。一代

しようぎよう みな によらい きんげん むりようこう このかた ふもうご ことば

の聖教は皆、如来の金言、無量劫より已来、不妄語の言

ほけきよう ほとけ しょうじき ほうべん す

なり。なかんずく、この法華経は、仏の「正直に方便を捨

もう しんじつ なか しんじつ たほう しょうみよう くわ

つ」と申して、真実が中の真実なり。多宝は証明を加え、

しょうぶつ ぜっそう そ たも 虚 うえ

諸仏は舌相を添え給う。いかでかむなしかるべき。その上、

さいだいいち ひじ きようもん のち ごひやくさい

最第一の秘事はんべり。この経文は「後の五百歳、

にせんごひやくよねん とき によにん やまい 説 そうろうもん

二千五百余年の時、女人の病あらん」ととかれて候文な

り。

あじやせおう おんとしごじゆう にがつじゆうごにち だいあくそう み しゅつたい

阿闍世王は御年五十の二月十五日に、大悪瘡、身に出来

だいい ぎば ちから およ さんがつなのか かなら し むけん

せり。大医・耆婆が力も及ばず、三月七日、必ず死して無間

だいじよう

お

ごじゆうよねん

あいだ

だいらくいちじ

めつ

大城に墮つべかりき。五十余年が間の大楽一時に滅して、

いつしよう

だいく

さんしちにち

集

じようごうかぎ

一生の大苦、三七日にあつまれり。定業限りありしかど

ほとけ

ほけきよう

重

えんぜつ

ねはんぎよう

名

だいおう

も、仏、法華經をかさねて演説して、涅槃經となづけて大王

与

たま

み

やまい

へいゆ

こころ

にあたえ給いしかば、身の病、たちまちに平愈し、心の

じゆうざい

いちじ

つゆ

き

ほとけ

めつごいつせんごひやくよねん

ちんしん

重罪も一時に露と消えにき。仏の滅後一千五百余年、陳鍼

もう

ひと

いのち

ちめい

もう

ごじゆうねん

さだ

と申す人ありき。命は知命にありと申して、五十年に定ま

そうら

てんだいだいし

あ

じゆうごねん

いのち

の

つて候いしが、天台大師に値つて十五年の命を延べて

ろくじゆうい

うえ

ふきようぼさつ

じゆみよう

六十五までおわしき。その上、不輕菩薩は、「さらに寿命を

ま

説

ほけきよう

ぎよう

じようごう

延

たま

かれ

増す」ととかれて、法華經を行じて定業をのべ給いき。彼

みな なんし

によにん

ほけきよう ぎよう

らは皆、男子なり。女人にはあらざれども、法華經を行じ

いのち 延

ちんしん

のち ごひやくさい

当

て寿をのぶ。また、陳鍼は「後の五百歳」にもあたらず。

ふゆ とうまい なつ きつか

とうじ によにん

ほけきよう ぎよう

冬の稲米、夏の菊花のごとし。当時の女人の法華經を行じ

じようごう てん

あき とうまい

ふゆ きつか たれ

て定業を転ずることは、秋の稲米、冬の菊花、誰かおどろ

くべき。

にちれん

はは

そうら

げんしん

やまい

されば、日蓮、悲母をいのりて候いしかば、現身に病を

癒

しかねん

じゆみよう

延

いま

によにん

いやすのみならず、四箇年の寿命をのべたり。今、女人の

おんみ

やまい

み

たも

こころ

ほけきよう

しんじん

御身として病を身にうけさせ給う。心みに法華經の信心を

た

ご

覧

立てて御らんあるべし。

ぜんい
なかつかさのさぶろうぎえもんのじようどの
ほけきよう
ぎようじゃ
しかも善医あり。中務三郎左衛門尉殿は法華經の行者

なり。

いのち もう もの いっしんだいいち ちんぽう いちにち

命と申す物は一身第一の珍宝なり。一日なりともこれを

延 せんまんりよう こがね 過 ほけきよう いちだい

のぶるならば、千万両の金にもすぎたり。法華經の一代の

しようぎよう ちようか もう じゆりようほん 故

聖教に超過していみじきと申すは、寿量品のゆえぞかし。

えんぶだいいち たいし たんめい くさ 輕

閻浮第一の太子なれども、短命なれば草よりもかるし。日輪

ちしや わかじに いぬ おと はや

のごとくなる智者なれども、天死あれば生ける犬に劣る。早

ハハハ たら ぐたいじ

く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御対治あるべし。

もう ひと もう よ

これよりも申すべけれども、人は申すによつて吉きことも

あり、また、我が わ 志 こころざし のうすきかとおもう者もあり。人の心 ひと こころ

知 うえ さきざき しょうしょう そうろう ひと ひと

しりがたき上、先々に少々かかること候。この人は、人

もう 少 こころ 得 気 おも ひと もう 悪

の申せばこそ心えずげに思う人なり。なかなか申すはあ

仲 人 平 情

しかりぬべし。ただ、なこうどもなく、ひらなさけに、また、

こころ 打 頼 たま こそ じゅうがつ きた そうら

心もなくうちたのませ給え。去年の十月、これに来つて候

ごしよろう 歎 もう とうじ

いしが、御所労のことをよくよくなげき申せしなり。「当時、

だいじ 驚 たま みようねんしょうがつにがつ

大事のなければ、おどろかせ給わぬにや。明年正月二月の

頃 かなら 起 もう 歎

ころおいは必ずおこるべし」と申せしかば、これにもなげ

い そうろう ときどの あま 御 前 つえはしら たの

き入つて候。「富木殿もこの尼ござんをこそ、杖柱とも恃

みたるに」もう なんと申して候いしなり。そうら 随分ずいぶんにわび候いし

ぞ。負 きわめてまけじだましいの人にて、魂 我わがかたのことを方

だいじ ば大事と申す人なり。もう ひと

かえすがえす、身みの財たからをだにおしませ給わば、この病治やまい

えがたかるべし。

いちにち 一日の命は三千界の財にもすぎて候なり。まずいのち さんぜんかい たから 過 そうろう

御志をみみえさせ給うべし。法華經の第七の巻に「三千おんこうろざし 見見 たも ほけきよう だいしち まき さんぜん

大千世界の財を供養するよりも、手の一指を焼いて仏・だいせんせかい たから くよう て いっし や ほとけ

法華經に供養せよ」ととかれて候は、これなり。ほけきよう くよう 説 そうろう

いのち さんぜん

過

そうろう

よわい

長

命は三千にもすぎて候。しかも齡もいまだたけさせ

たま

ほけきよう

遇

たま

いちにち

生

給わず。しかも法華經にあわせ給いぬ。一日もいきておわ

くどく 積

惜

いのち

いのち

せば功德つもるべし。あらおしの命や、あらおしの命や。

ごせいめい

おんとし

われ

書

たま

遣

御姓名ならびに御年を我とかかせ給いて、わざとつかわ

だいにちがつてん

もう

上

伊予

殿

歎

せ。大日月天に申しあぐべし。いよどのもあながちになげき

そうら

にちがつてん

じがげ

当

そうら

きようきよう

候えば、日月天に自我偈をあて候わんずるなり。恐々

きんげん

謹言。

あま 御 前 ごへんじ

尼ごぜん御返事

にちれん

かおう

日蓮 花押